

神の僕として生きる 改

しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それはあなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。

先週、わたしたちが学んだ御言葉です。この手紙のなかで最も有名な、この手紙を代表する御言葉といってよいものです。ペテロは「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ピディニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人々」、簡単に言ってしまえば、イエスをキリストと信じて生きたために宗教的な難民状態となっている人々に向けて、この手紙を書きました。繰り返し申し上げていますが、この「離散して仮住まい」「ディアスポラのパレピデーモス」な状態が、神様によって選ばれたためであるという理解はキリスト者とは何かということをもっともよく説明するものです。わたしたちはこの理解にしっかりと立たなければならないのだと手紙を読み進めて強く思わされています。これによってわたしたちが旅する民であること、「仮住まい」を「寄留者」と訳すこともあるように、この地上に一定の期間、職業も、家庭も、居場所もすべてを恵みによって貸し与えられて生かされている神の僕であることをわきまえる。この地上が永遠の住み処なのではなく、その先を望み見て生きる者たちとされている。そのために、わたしたちは神様によってたんぽぽの綿毛のように吹き散らされた者、各地に撒かれた種なのです。まさに散らされている。それは収穫のときを待っている状態。やがて神が終わりのときにすべてを集められる。わたしたちが日曜のたびごとに集まって、礼拝をし、死を打ち破られたキリストの御業を喜び、賛美しているのは、やがて神の民が集められ、神の勝利が明らか

にされるその前祝いと言いますか、先取り。地上を歩む神の民として、神の愛を心に刻み、キリストの教えによって、この世を生き抜く力と励ましを頂き、復活の主イエス・キリストに従うことで命の道を確認しているのです。そのことによってわたしたちの生き方がこの世界とは異なったものになる。それが証となる。わたしたちを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、こうしてわたしたちが広く伝えることになる、と言われる通りです。

ペテロの手紙の受取人となった人々は、キリストに従った結果、宗教的な難民状態となりました。散らされて仮住まいというキリスト者の資格を得た。あらためて考えますと、この「離散した仮住まいの選ばれた人びと」というペテロの表現は、たとえば430年間のイスラエルのエジプトでの奴隷生活、ファラオに仕えさせられ、過酷な労働条件に呻き、理不尽な暴力のもとに置かれた時代にも、また国が滅び、敵国の都バビロンに拉致されて行き、70年を過ごさなければならなかったときも、「離散した仮住まいの選ばれた人」としての苦しみであったと言えるでしょう。この世が地縁や血縁の生み出すしがらみや欲に囚われ、罪と死の支配の虜とされた捕囚の状態にあるならば、「離散した仮住まいの人びとである」ことは、キリスト者にとって本質的なことなのです。わたしたちは、この捕囚の現実をすどく意識しながら、この散らされている状況、みずからが寄留者として天を目指す旅人であるとの意識をもって生きること、キリスト・イエスが伝えてくださった消息に従って生き抜くことが「神の僕として生きよ」という招きに応えることだと弁えたいのです。そしてそれは神様のことを知らない人びとの間から選び分かれてキリスト者とされた者たちにとっては、王の系統を引く祭司としての自覚を持って、神と人との間の執り成しをする。そのために異邦人の間で立派に生活しなさいという勧めがなされてゆく。それが2章11節から4章までつづくキリスト者として理解のない世界で、場合

によっては敵意すら向けられることのある世界でどのように生きるかというキリスト者の生き様の問題となっているのです。

実際、ペテロの手紙の受取人となった人びとも、このように生きてきた結果、ユダヤ教ナザレ派とローマによって見做されていた状態から、分かれていくことになりました。ユダヤ教内部から、ナザレ人イエスを主と告白する者は呪われよ、とコミュニティから追放されてゆきました。最終的な教えや制度が確立してゆくのはまだ先ではあるのですが、このペテロの手紙や、パウロの手紙など、新約聖書に収められている手紙によって初代教会の時代のさまざまな戦いが浮かび上がってきます。クリスチャン、キリスト者という名称はシリアのアンティオキアで始まったと使徒言行録に記されています。明らかにユダヤ教徒とは違う生き方によって、周りにも分かるかたちで変化が生まれ、キリスト教徒と呼ばれる群れが誕生しはじめる。それは同時にローマ帝国の認めた宗教の枠の外に出ることでもありました。ユダヤ教はきちんとローマ帝国の公認宗教に入っているのです。そういう事情をわきまえますと、危険なセクトや、現代で言うならばカルト的な、破壊的な宗教団体ではないかという疑いを抱かせないために、12節にありますように「異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりはしていても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります」と勧められるのです。この訪れの日とは、キリストが再び来られる日のこと、収穫の日のことです。

わたしたちはどうでしょうか。宗教を自覚的に捉える感覚を持たず、鎮魂・慰霊、あるいは冠婚葬祭の時に利用するものと考えている日本の社会のなかで、世間のなかで、この人々は違うと、異教徒のなかで立派に生活をしているのでしょうか。キリスト者として礼拝や、祈禱会、諸集会に参加し、時間や能力や財をささげてキリストの身体である教会の枝となり、人格と人生と共同体を御言葉との対話を

通して作り上げる。散らされていま根付いている場所がこの半田教会であること、しかし、同時にそれは仮の宿りであり、ここを天国への門として、神を仰ぎ、御国への準備をしている。わたしたちが良い意味で、周囲から、不思議な存在にみえることを願っています。そういえばもう何年も前に、教会学校から来ている青年に洗礼を勧めたら、教会はコストパフォーマンスが悪いと言われた話を紹介したことがあります。勧めた役員はがっかりしたみたいですが、わたしは喜んだのです。世の中のような価値観に生きていないことこそ、天にある朽ちることも汚れることも羨むこともない資産を目指してわかちあい、ゆずりあい、学び合いに生きる教会の本質を生きていることだからです。教会がコストパフォーマンスを第一にするようになったら終わりです。

さて、今日の箇所も触れなければならない箇所がたくさんあり、コロナシフトで、説教の時間に制限をもうけているために一番問題の箇所だけを最後に取り上げます。それは「主のために、すべて人間の立てた制度に従いなさい。それが統治者としての皇帝であろうと、あるいは、悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと、服従しなさい」という13節です。たぶん昨今のウクライナをめぐる世界情勢や、日本の政治、社会状況のなかで生きていますと、本当にそうか、と脊髄反射的に考えると思いますし、それは正しいと考えます。絶対的権力は絶対的に腐敗するという有名な言葉があるのですが、結局、人間の生き方において神が失われていったときには、自分というもの、自分の利益、快適さというものが中心に据えられてゆきます。サタンの誘惑にあった「石をパンに変えよ」に象徴されるような、生きる意味と目的を問うことのない検証のない自己の延長、自己顕示欲を満たすために行われるパフォーマンス、そして自分のうちに世界を取り込もうとする終わることのない欲のぶつけ合い、キリスト・イエスが退

けたそうした誘惑に、この世界は囚われ続けている。そのなかに途方に暮れているわたしたちもいるわけです。批判しつつ、自分もその大きな流れやシステムの一部になっているという問題ですね。そうしたなかで、「主のために、すべて人間の立てた制度に従いなさい。それが統治者としての皇帝であろうと、あるいは、悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために、皇帝が派遣した総督であろうと、服従しなさい」という勧めをどのように理解したならば「神の僕として生きよ」という勧めを生きることになるのか。ひと言でまとめてしまえば、冒頭で紹介した「しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民」であるという理解、つまり、聖なる祭司としての働きをわきまえること、これは11節にも「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいをしている身なのですから」とあるように、土地のつながり、血の繋がりに囚われ続けるこの地上の価値から切り離され、真に自由な存在へとキリスト・イエスによって作り変えられていることゆえに可能となる働きです。神と人の間に立って、執り成しの働きをすること、その基準は17節に「すべての人を敬い、兄弟を愛し、神を畏れ、皇帝を敬いなさい」とまとめられています。ここに留まらねばなりません。この文章は対句になっていて、使われている動詞に注目しますと、敬いなさい、愛しなさい、畏れなさい、敬いなさいと、敬いなさいという動詞が二度繰り返されて、愛しなさい、畏れなさいを囲い込む形です。すべての人と、その上に立つ皇帝は敬う、つまり敬意の対象として扱う。兄弟姉妹に対しては愛して生きること、そして、創造主であり世界の完成者である神を畏れて生きること、敬神愛人というスローガンにまとめることもできますが、この基準にしたがって、「主のために、すべて人間の立てた制度に従いなさい」という教えにも、わたしたちは向かい合います。ですから、この勧めは、キリスト者に体制への批判のないフォロワーになれとい

うことを勧めているのではありません。よく読めば、この手紙でも皇帝や皇帝が派遣した総督の役割は「悪を行う者を処罰し、善を行う者をほめるために」と限定されていることに気づきます。アメリカの公民権運動、マルティン・ルーサー・キング牧師の指導した働きなどを見ても、社会制度が悪であるならば、手段を抑制しつつ、敬意をもって意義の申立をしてゆくことも聖なる祭司として立てられているわたしたちの大切な努めなのです。そのためにも現代を生きるわたしたちに、この手紙は、あなたは自分のことを「離散した仮住まいの者」、寄留者であることを自覚していますかと問い続けます。やがて、死というかたちでこの世界から退場してゆくわたしたちに、神がキリストにおいて用意してくださっている場所があり、死が眠りに変えられているという生ける希望を頼みとしているか、そこを問い続けています。ここに立つことこそが、キリスト者として、わたしたちが神さまを知らない周囲に示すことのできる大きな喜び。死を前にして、終わりを前にして、恐れではなく、主の平安に守られる幸い。最後に勝利の主がすべてを裁かれるがゆえに、地上の権威に敬意をもって仕えることにも、批判することにおいても自由である生きざまを約束するのです。神を畏れることを第一として、神の僕としての狭い道を歩むわたしたちと共に主は働かれ、祝福しておられます。

お祈りいたします。